

# 講演1 家族の立場から

笠井 恵美

私の息子は幼少時から「こだわりの強さ」がみられた。保健所での健康診断、子ども家庭センターの発達相談、大学病院への受診をしたが、知的発達にも言葉にも遅れは無かったことから診断名はつかず、専門的な療育は受けずに地域の幼稚園・小学校に通学した。しかし、集団の場面では、特に「人間関係の理解」が難しく、柔軟性に乏しく、変化に対応できにくいといった特性が目立ち出した。小学3年生で「アスペルガー症候群」と診断された。「ファンタジーと現実の区別が曖昧、空間的な情報の把握・処理が苦手」であると指摘され、また“言葉で定義づけし物事の順を追って説明をしていくこと”を勧められた。現在は2ヶ月ごとに受診。診断がついたことで、本人に合った療育、支援の方法を専門書や親の会の情報、各種研修会等から得ることができ、より適切な支援ができるようになった。

小学4年生3学期ごろ、友だちとのトラブルが増えたので、学年団の担任と相談。級友から見た本人像を出してもらい、4年生全児童に本児の特性を説明する機会を得た。本人も同席。テーマは「僕の考え方は、他の人と少し違う」であり、内容は、①冗談を本気にして怒ってしまう。②給食当番がうまくできない。③ドッジボールが嫌い。④他の人と考え方が違う、の4つです。①の冗談は言葉通りに受けとるから自宅でも困っているが、説明をしたらわかることもあること。②の給食当番は、自分の決めた手順で作業をしたいけど、他の人は違うので混乱してしまうことがあること。③のドッジボールはコートラインを踏み越える人がいて、それを許せないのが嫌いなこと。④は、「他の人が、“まあこれでいいか”と思えることが、思えない」こと。本人が、自分には心がいっぱいあると説明した時、「絵を描いた方がわかる」と発言し、以下のような説明を加えた。

“みんなの心は一つで、その時の状態とか前に起きたことがすべて入っている。だから質問されたことに正しく答えられる。心から情報を取り出して答えられる。僕の場合は、心が一つ一つバラバラになっている。情報を取り出すのに時間がかかったり、間違ったりする。”

これ以降、仲の良い友だちが本児への対応を周囲の児童に教えてくれる場面も多く見られており、6年生になった現在ではパニックも殆ど起きていない。友だち関係や遊びのルールを少しずつ理解しドッジボールも参加できるようになった。

講演会では、実際に周囲にいる児童生徒がどのようにして支援しているのか、また教員や保護者が、支援してくれている児童生徒たちにどう関わっていくのか、現在小学校6年生の息子の事例を通し考えていきたい。

昨年度、あるテレビ局から取材を受け、「ぼくのことを分かってほしい」という15分の番組として編集された。映像を通し、息子は社会性の困難は少なくないが、周囲の友だちに日常的にいろいろな支援を受けていることがよくわかる。番組の中で障害名は出していないが、「ちょっと他の子とは違うけど、僕のことを分かってほしい。」と考えている息子と友だち関係を見ていただき、目の前の困っている子どもに、すぐに対応できる支援とは何かということ、一事例として、息子のことを通して考えられたらと思う。